

カトリック香里教会 待降節第2主日 2020年12月6日

神の子イエス・キリストの福音の初め。預言者イザヤの書にこう書いてある。「見よ、わたしはあなたより先に使者を遣わし、／あなたの道を準備させよう。荒野で叫ぶ者の声とする。『主の道を整え、／その道筋をまっすぐにせよ。』」そのとおり、洗礼者ヨハネが荒野に現れて、罪の赦しを得させるために悔い改めの洗礼を宣べ伝えた。ユダヤの全地方とエルサレムの住民は皆、ヨハネのもとに来て、罪を告白し、ヨルダン川で彼から洗礼を受けた。 -マルコ1章-

主の道を整えよ

神の日の来るのを待ち望み、また、それが来るのを早めるようにすべきです。その日、天はやけ崩れ、自然界の諸要素は燃え尽き、溶け去ることでしょう。しかし私たちは、義の宿る新しい天と新しい地とを、神の約束に従って待ち望んでいるのです。(IIペトロ 3.12-13)

もし心があれば土の中の金塊は「不純物が除かれて早く純金になりたい」あるいは「不純物と一緒にいる方が楽しくて、そのままでいたい」と思うのか、どちらを選ぶのでしょうか？

わたしたちは、「御国が来ますように」と毎日唱えて、天上の輝かしい報いを受けようとしていながら、捕らわれの身にある地上にいることが楽しいのなら、どちらを選んでいることになるでしょう！

バビロン捕囚の不幸は、奴隷から解放された民が、荒野で飢えに苦しんだ時、肉や玉ねぎを食べられたかつての暮らしを思って「栄光への脱出」を後悔し、神から罰せられながら、約束の地で安住するや、豊かさの虜になって、自ら招いた自業自得の苦役でした。

今日の福音は、70年の苦役を通して身の誤りに気付かせ、民に再出発の手を差し伸べた神の「親心」でした。親がわが子を忘れようとも、わたしたちの神は、どんな罪びとも見捨てる方では決してありません。

「神を見たものは死ぬ」と信じて恐れていた民の中に到来を決められた神が「人間」の姿をとられたのは、裁判官としてではなく、「自主性」を重んじ、ヨハネに準備させた正しい道を、「見て、聴いて」信仰者として歩む人になってもらいたためでした。

この神の計画を最初に知らされた人物が、「心砕かれ」「聴く耳」を持った乙女マリアでした。

「私たちはみんなマリアにならなければならない」と聖アンブロジオは言いました。でも誰もマリアになりたくないのです。それは、神の言葉を受け入れるには、自我に死ななければならないからです。聖霊は空の器に注がれるのです。

神の言葉の前でマリアは自我に死に、受けた聖霊の実を世にもたらした方でした。イエスも、受難を前にして自我に死に、十字架から「マリアの子」になるよう私たちに諭し、復活への道を示して天で待っておられる「マリアの子」です。

待降節を最初に生きた方。それはマリア様でした。私たちもその「マリアの子」なのです。

2020年 12月 6日 主任司祭 昌川 信雄

